

の大菩提心であるとする。そのために、放生する動物には、阿弥陀仏の名前と経文を聴かせて、来世で西方浄土に往生させることを勧めている。

日本近世においては、まずは律僧を中心として株宏の著作が出版されており、不殺生の思想も律僧を中心に受け止められた。たとえば、株宏は「百千万億の蚕の生霊を熱湯に入れて殺」(山房実録・論虫)して作る絹の禁止を呼びかけた。自らの善悪の行為を数で計算して自省を促す『自知録』では、養蚕業の廃止を五善としている。この絹の禁止の主張は、唐代の道宣の主張を論拠としながら、近世から明治時代までの日本の律僧によって、広く実行された。

「アヒンサー」の実践をめぐる

チベット仏教僧と漢民族信徒の関係

別所 裕介

本論は、仏教規範のひとつである「不殺生戒(アヒンサー)」の実践を取り上げ、その実践を媒介として密接なつながりを構築している現代中国のチベット仏教僧と漢民族信徒の関係の特質を捉えようとするものである。

ここで事例として取り上げる「不殺生」の規範はふたつの含意をもっている。ひとつは、非暴力・不服従運動の父であるマハトマ・ガンディーによる示唆を重要な契機とし、現在のチベット亡命政府の基本方針として打ち出されている。理念的規

範」としてのそれである。亡命政府の首長であるダライラマ十四世は中国に対して領土要求を取り下げる代わりに、「全チベットを『アヒンサー』の理念に基づく恒久的な自然保護区とすること」を要求している。これは政治的交渉の産物であると同時に、「チベット人が今後、どのような仏教実践の主体として中国に存続していくべきか」という、ナショナルなレベルでの民族のあり方を本土に暮らすチベット人全体に向けて問いかける作用を果たしている。

他方で、当然ながら本土チベットの生活社会では、村落コミュニティにおける「自然本性的規範」としてのアヒンサーが、ナショナルな意味での「チベット人」概念の総体とリンクすることなく黙々と実践されてきた。そうした実践をローカルなレベルで体现するのは、村単位で創建された寺院を束ねる高位の密教僧である。前近代までの伝承では、こうした村レベルで尊崇を集める宗教者が、山の神や水の精霊など、コミュニティのサブステンスにかかわる超常的存在と交感することで、村人が過剰な財を求めて資源を乱獲したり、野生動物を無為に殺傷したりすることのないよう、逸脱を戒める役割を果たしていた。

本論では、このようなアヒンサーをめぐるふたつの条件的布置の元で、「中国人一般」と自分たちとを隔てる重要な差異として言及されるナショナルな意味でのそれではなく、実体としての「殺さない」という自然本性的規範が他民族・他社会との接合面において共通の実践基盤となっている事例を取り上げ、その背景となる社会的諸条件を整理した。

取り上げたのは、湖北省武漢で毎年行われている、チベット仏教僧を導師とした「放生儀礼」である。鯉などの魚類一般、および蛙や亀などを市場で買い、これを自らの手でもとの場所へ返す、という放生の行為は、近年の中国都市部の仏教系団体が好んで行う修道実践であり、これ自体はチベット仏教儀軌との直接の関係を持たない。しかし、近年チベット東縁部で大きな勢力を誇るゾクチェン系の僧院では、指導僧がこぞって放生の功德を説く教書類を漢語で出版しており、それらは定期的にこれらの僧院へ往來して教えを授かる漢民族信徒たちの間に広く普及している。本論の事例では、チベット東縁部の本山で受戒し、武漢で修道センターを立ち上げた漢民族の女性行者が、自らの受戒僧であるラマを遠くチベットの本山より招請し、トラック四台分、八千五百キロ余りにのぼる水生類を市場で購入したうえで、ラマの指導のもとでこれを長江に放流し、「不殺生戒」の実践による功德を信徒全員で分かち合う光景が展開されていた。

チベット東縁部では、二〇〇一年に漢民族信徒との関係で大きな転機を迎えており、それは地元政府による外来信徒の強制排除という形で幕引きを見ている。これ以降、漢民族信徒が指導僧を内地に招き、共同で遂行可能な修道形態として、もともと内地でも盛んに行われている放生儀礼を借用した、という解釈が可能である。

今後は、チベット僧と漢民族信徒との日常的応答関係をさらなる事例から照射しつつ、そこに見られる不殺生の実践と、ナショナルな自己形成の理念として本土チベット社会に土着化さ

れていく「アヒンサー」の関係をさらに踏み込んで検討していきたい。

近代中国東北部仏教の一動向

野 世 英 水

近代の中国東北部には多様な宗教が存在し、独自にまたは相互に関係しながら活動していた。そのうち仏教は在来の仏教のうえに管内の仏教が流入し、さらには日本による東北部支配が強まるにつれて日本の仏教も流入することとなり、それらは政治的諸関係を背景としながら複雑な相互関係を生み出していた。ここではこのような近代中国東北部仏教の動向を日中戦争の戦前戦中ごろに時期を絞りつつ見てゆくこととしたい。また考察の基礎史料としては、一九八〇年代から順次編纂刊行されてきている中国の地方志をおもに用いることとしたい。地方志を用いた研究としては、大谷大学桂華淳祥先生のすぐれた先駆的業績がある。本稿はそのご研究に導かれてのものでもある。

地方志にみられる東北部のおもな中国人仏教者としては、倭虚(諦閑の弟子、多くの寺院を創建、修復)、如光(倭虚の弟子、ハルピン極楽寺方丈、満洲国仏教総会会長)、善果(倭虚の弟子、長春般若寺方丈、満洲国仏教総会新京支部長)、澍培(倭虚の弟子、長春般若寺方丈、満洲国仏教総会副会長)、仁信(長春般若寺知客)、如蓮(吉林観音寺方丈、満洲国仏教総会吉